

平成 28 年 12 月の解説（府県天気予報）

【12 月の天候状況】

上旬は、北日本では気圧の谷の影響を受けやすく、旬降水量が多くなりました。特に 9 日から 10 日は低気圧が発達しながら北日本を通過して、札幌で 10 日の日最深積雪が 65cm に達するなど北海道日本海側を中心に大雪となりました。一方、本州付近は大陸から移動してきた高気圧に覆われやすく、冬型の気圧配置は長続きしませんでした。このため、東・西日本では気温が高く、太平洋側は晴れの日が多くなりました。沖縄・奄美では、前線の影響を受けやすく、前線に向かって南から暖かく湿った空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温はかなり高くなりました。

中旬は、旬のはじめに北から強い寒気が流れ込み、冬型の気圧配置が強まりました。13 日から 14 日にかけては、本州南岸を低気圧が発達しながら通過したため、全国的に天気が崩れました。その後は、17 日頃にかけて全国的に強い寒気が流れ込み、北・東・西日本日本海側は概ね雪や雨となり、東・西日本太平洋側の平地でも雪となったところがありました。旬の終わりは冬型の気圧配置が緩んで、高気圧が本州付近を通過したため、全国的に寒さが緩み、日本海側でも晴れたところが多くなり、北日本日本海側では旬間日照時間がこの時期としてはかなり多くなりました。

下旬は、旬の中頃にかけては、低気圧が日本海から北日本を発達しながら通過し、発達中の低気圧に向かって南から暖かい空気が流れ込みやすくなりました。このため、北日本太平洋側と西日本では旬降水量がかなり多く、特に西日本日本海側では旬降水量が平年比 320% となり、12 月下旬として旬降水量平年比の多い方からの 1 位の値を更新しました（統計開始は 1961 年）。また、東・西日本では旬平均気温がかなり高く、沖縄・奄美でも高くなりました。特に 22 日には、日本海にある発達中の低気圧に向かって南よりの強い風が吹いたため気温が上昇し、東日本日本海側と西日本の各地で 12 月としては記録的な高温となりました。この低気圧は 23 日には急速に発達しながら北日本を通過したため、全国的に雨や雪となり、北日本では大荒れとなり、東・西日本では大雨となったところがありました。また、北海道地方を中心に大雪となり、特に札幌では 23 日の日最深積雪が 96cm に達し、12 月として 1966 年以来 50 年ぶりに 90cm を超える積雪となりました。

月平均気温は、東・西日本、沖縄・奄美でかなり高くなりました。月降水量は、東日本太平洋側、西日本でかなり多く、北日本太平洋側で多くなりました。降雪の深さ月合計は、東・西日本でかなり少なく、北日本日本海側で少なくなりました。また、月最深積雪は、北日本で多いところが多く、東・西日本では少ないところが多くなりました。

【12 月の検証結果】

17 時発表の天気予報による「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報は例年値^(注)より 3 ポイント高い 86% で、明後日予報は例年値より 2 ポイント高い 83% でした。各地方の適中率では、明日予報については、関東甲信、東海、中国の各地方で 5~7 ポイント高くなりました。明後日予報では、北海道、東海、中国の各地方で 5~6 ポイント高くなりました。

明日の最高気温の予報誤差は、全国平均で例年値より 0.2 小さい 1.3 となり、全ての地方で例年値より小さくなりました。特に九州南部地方では、例年値より 0.5 小さくなりました。最低気温の予報誤差は、全国平均で例年値より 0.3 小さい 1.3 となり、全ての地方で例年値より小さくなりました。特に東海、九州北部、九州南部の各地方では、例年値より 0.5~0.6 小さくなりました。

(注) 例年値は気象庁 HP（予報精度検証）内「毎月の精度の例年値」を参照してください。

【2 月の天気予報の利用にあたって】

2 月は 1 月と並んで 1 年で最も気温が低い月ですが、低気圧が発達しながら日本海から北日本に進むと、強い南よりの風が吹いて気温が急激に上がり、低気圧通過後は強い北よりの風が吹いて気温が急速に下がるなど、気温が大きく変化することがあります。また、低気圧が日本付近を発達しながら通過する場合、暴風や猛ふぶき、大雪、なだれなどによる災害が発生しやすくなります。災害に備えて、各地の气象台が発表する最新の気象情報や注意報、警報に留意するとともに、日々の天気予報を利用して気温の急激な変化にも備えてください。